



つるぎ

266  
235

094591-000-8

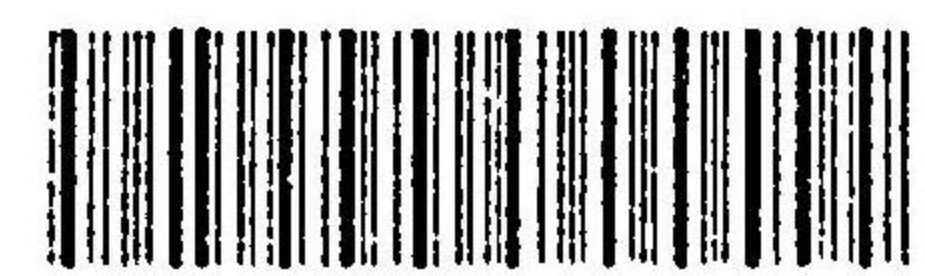
特63-424

つるぎ

水暮/著

M44

DBQ-2112



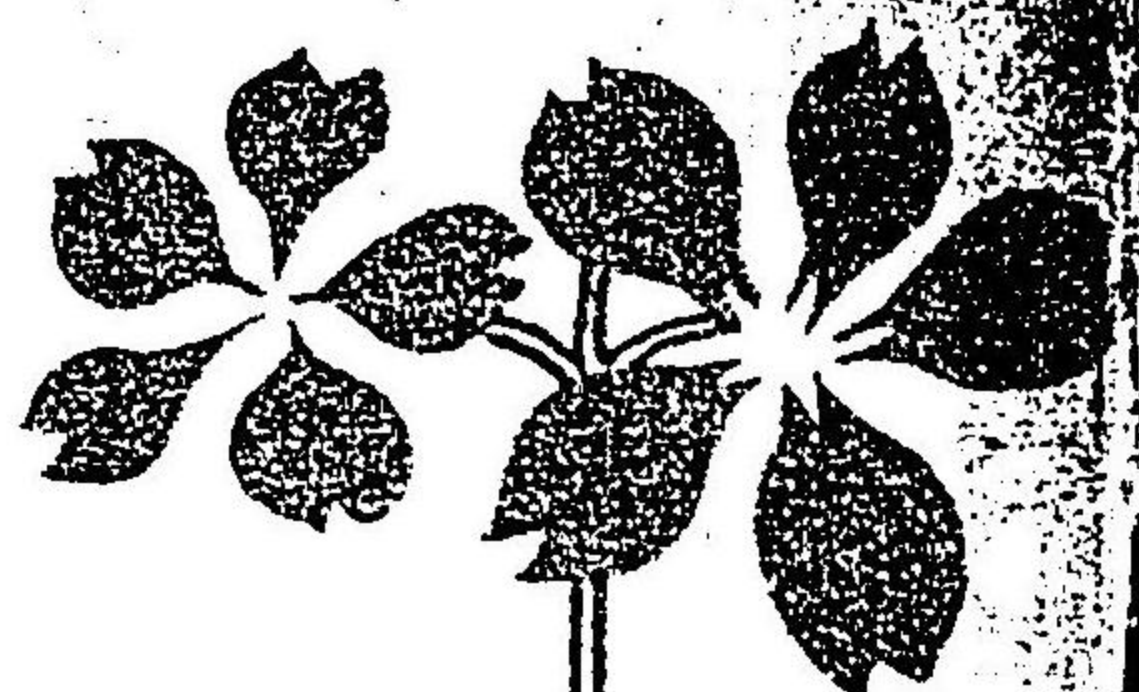


ころも



水春

266  
235



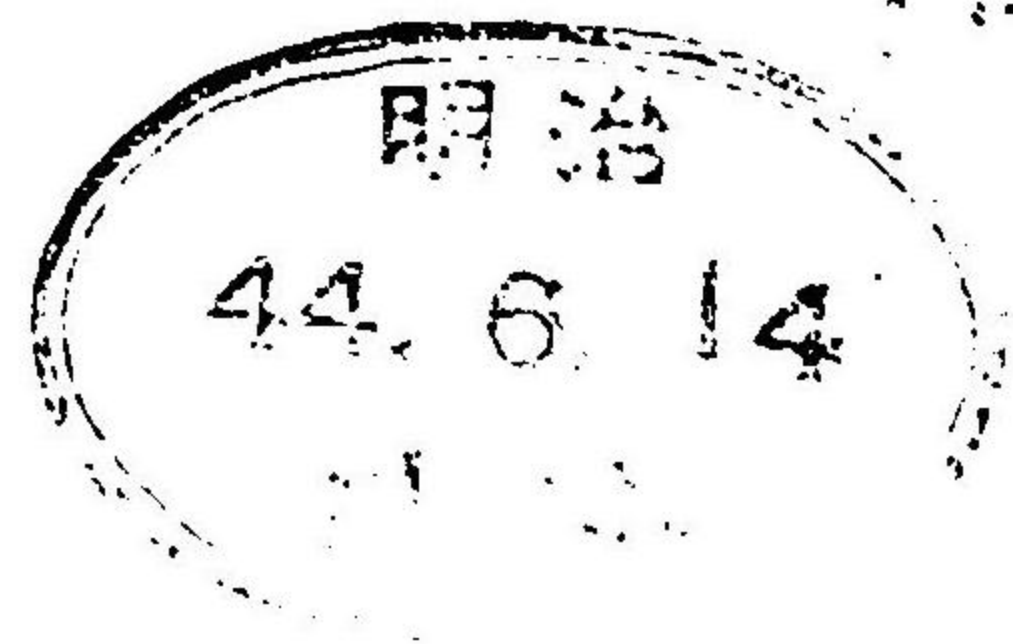




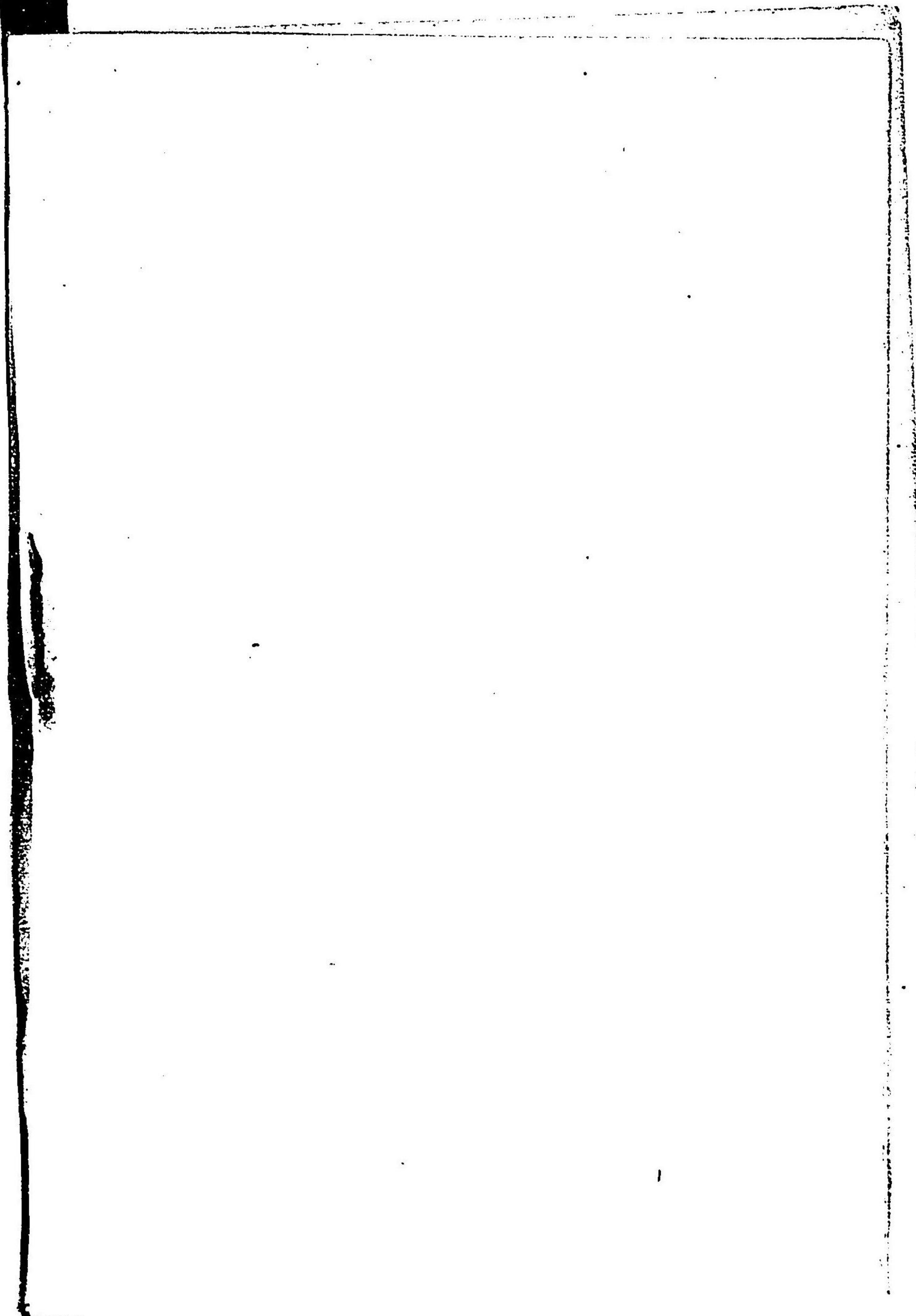
ま

水

暮













特63  
424

目次

つるぎ.....一頁

歸郷の後.....101



(1)

き る っ

小軍  
説事  
つ  
る  
ま

(一の一)

長途の行軍で人も馬も疲勞しきつた我が騎兵中隊は、日没頃此の山  
間の一小市街に着いたのである。

時は九月下旬の某の日、夕日に背いた日本アルプスの連山はコバル  
トブリウに霞んで、一番高い峯の頂巔にはフウワリとした綿雲が引  
掛つて居る。それが又燃える程赤く染つて居る。そして何時とはな

水

暮



しに暗灰色に暮れる。

山間の秋は殊に早い。平原は未だ夏の餘威を残して居るのに、此所ではモウ木の葉が赤らんで居る。何とか云ふ木は葉さへ落ちた。

田中と云ふ家へ泊つたのは軍曹小林猛を長として、初年兵が三名、一年志願兵古暮清と合計五名である。

頭の禿げ込んだ品の良い、昔氣質らしい六十に届きさうな主人が、少し腰を屈めて案内する。

十も若さうな内儀さんが種々世話を焼いてくれる。

長靴を其所へ脱ぎ捨てたまま、五人の荒武者が其の後から上つて行く。

案内されたのは離室の八畳だ。近年新築した建物らしく、未だ煤け

た跡も見えず、新しい畳の匂も通つて、明るくなつた様な氣持がす

る。床には誰かの軸が厳しく掲げられて、傍には袋に包まれたヴェキ

オリンが所在なささうに置かれてある。

後から女中が座蒲團を持って来て敷いてくれた。是れも客用と見え

て、可成華美なものであつた。主人は、

「さ、皆様お敷きなすつて、御悠りお休みなさいまし。その中湯も

沸きますですから、さ」と自分で座蒲團の位置を決めて、頻りにす

すめる。そして火鉢へは赫々と炭を焼べた。

一同は刀を脱るやら帽子を脱ぐやらして、漸く火鉢の傍へ寄つた。



初年兵は三人とも煙草に火を點けた儘出て行つた。主人は後から聲をかけて、

「靴でございますか。靴なら私共で手入を致させますから、まあお休みなさいまし」と止めた。けれども初年兵は歸らなかつた。

「私共が何でも御用は致しますから、何卒御悠り………」と主人は琉球塗の巻煙草入を開いてすすめる。

角顔な、髻だらけの眞黒な、そして恐ろしく光る眼を持つ小林軍曹と、軍人に似合はぬ色の白い、輪廓の調つた顔立、笑ふ時白い齒並を見せて、男にしては美し過ぎる程の好男子の古暮との對照は随分奇觀だ。

障子の硝子を透して見ると、外は暗くなつたが、何所となしに物販かだ。厨の煙は町を蔽うて居る。

此の町へ軍隊の宿泊したのは今回が始めてだとのことで、最も熱烈なる歓迎を受けた。町民は各自兵士を奪ふ様にして自分の家へ導いた。聞けば宿泊に漏れた家では、一人でも宜いから是非泊つて貰ひたいと願つて出たと云ふことだ。随つて待遇の懇篤知るべしだ。

折から娘が茶を入れて持つて來た。名を雅子と呼んで、當家の秘藏娘、町内第一の美形である。

芳紀は十八。色の白い整つた顔には、眞黒な瞳が動いて居る。美事に發育した全身には、乙女らしい匂いと潤ひとを持つて居る。



主人は銀製の器に盛つた菓子すすめながら、

「雅、暗くなつたな。燈火は何うしたか」と訊く。

「はい、只今秋やが掃除をして居ります」と娘は羞らひながら云つて立去らうとする。

「ぢや早く。それから向ふの兵隊さんも直に入らッしやる様にな」

「はい」

娘は淑かに答へて出て行つたが、主人は何を考へ出したのか、急に立つて後を追つた。

(一の二)

主人が出て行くと、小林軍曹は古暮志願兵の横腹を肱て突いて、

「古暮志願兵、今の娘は雅子とか云つたね。素敵な別嬪だつたな」

と日に焼けた髯顔に笑を浮べてニヤ／＼する。

「田舎には珍らしいですね」

「夢にても彼の様な美人に慕はれて見たいなア」と軍曹は聲を上げて笑つた。

其の時女中が置洋燈を持って来て點けた。

初年兵も手入が済んだのか、ドヤ／＼入つて来たので、話は其の儘消えて了つた。

後から主人が尙一つ洋燈を持って来て、次の間へも點けた。そして



女中に間の襖を外さして了ふ。二間押通しになつて廣々した。

女中は用事が済むと直ぐ出て行く。

主人は何かと氣を配つて、

『これて少しは廣くなりました。はい、兵隊さんの方では電燈でせうか 私共では未だ洋燈で。ハ、ハ、ハ、』  
一人て饒舌つて一人て笑つて居る。

『さ皆様、此方へも入らツしやい。そして足でも長くしてお休みなさい。兵隊屋敷に比べると普通の家は、天井が低くツて宛て穴倉みたいでございます。まア横にでもおなりなすツて、さ皆様』と主人益々調子に乗つて饒舌る。

『御主人の氣焔には恐入りますな』

『なに、軍人の宿は松の根でも石の上でも關つたことはないのて、所選ばずです。ハ、ハ、ハ、』

兵士等は聲を合せて笑つた。

『あの、何誰様かお湯をお召しなさいまし』と女中が遣つて來た。主人は傍から之に和して、

『さ、何誰でも御遠慮なく……』とすすめる。

『有難う。ぢや早速……』

小林軍曹立上つて、やをら軍服を脱ぎ、纏て女中の案内に従つて浴室へ出掛けて行く。



主人は何くれと遺算のない様に、用心深い目付で室内を見廻つて居たが、新聞と寫眞帖とを持出して來た。

「こんな片田舎のことで、何もお慰みになるやうな物もございませんで……」と、禿頭を撫てながら行つて了つた。

後は兵士ばかりの團欒。日記を書く者もあれば、今日の面白かつた事を語り出して腹を抱へて居る者もある。銅鑼聲がガン／＼と障子を鳴らす。

其の中に軍曹は湯から戻つて來た。古暮が交つて出て行く。

教へられた通り廊下を廻つて行つた。外はモウ眞暗になつて、岩槍葉の茂つた築庭には瀧の音がザア／＼と噪いて居る。

湯に漬つたまま窓から外を眺めると、小區域ながらも、夜氣を透して其邊の景色が目に映る。溪流の音が絶えず同じ様に響いて來る。

流れて行くから流れて來るのか、流れて來るから流れて行くのか、腸を洗つて行く様に心持の良い音を立てて流れる。其の水晶の様な水が湯場の桶に入つて、溢れて、ぞして零れて居る。

古暮は何だか仙境へ連込まれた様な心持がして、ポカンと考へ込んだ儘湯に漬つて居た。

コトン／＼と音がして入口の戸が開いた。そして娘——雅子の姿が現れた。



『お湯は如何でございますか』と滴る様な笑顔。

古暮は不尠ドギマギして、

『は、結構です』と間に合せの返事をする。

『御用がございましたら、御遠慮なくお呼び下さいまし』

『有難う』

『何卒御悠り』

雅子は元の様に戸を締めて、静に上草履を引摺つて行つて了つた。

古暮は、明るい所から急に暗室に入つた様な心持がして、霎時は襟

足の白い幻影を追うて居た。

『莫迦な』

自分で自分を叱して、桶に溢るる冷水をザブリ被つて湯を上つた。

室へ歸ると、初年兵連は三人一緒に湯に行かうと噪いて居た。そして

て三人で身體の洗ひツこの相談だ。

小林軍曹は本部へ命令を聴きに行つた。

後は古暮一人で少し物淋しくなつた。所在がないので、先刻の廊下を瀧の見える所まで行つて見た。と、何所からか話聲が聞える。古暮は聞くともなしに耳を欬てた。

『お湯なら妾今見て来たところなの』



『アラ左様でございましたか、済みません。妾臺所の方が世話し  
かつたもので、どうも……』

『今夜なんか別だわ。家内總掛りて兵隊さんを慰めて上げるんだわ  
ね』

話の主は正しく雅子と女中とである。女辯士が今しも座敷の真中で  
立話の最中と知れた。

俄かに足音がした。此方へ来るらしい。古暮は驚いて、恰も石川五  
右衛門が千鳥の香爐を盗んで立去る時の様な恰好で、倉皇自分の室  
へ引上げた。けれども足音は何所へか消えて、誰も來なかつた。  
古暮も今度は場所を替へて、離家の椽側を逍遙し始めた。

白い弦月が凋落の梢に慄ひ著いて、霜を置いた庭の常盤木に接吻を  
して居る。

木々の梢を透して街の灯が隠見して見える。古暮は母の背に乗つて  
夜祭の灯を見た古い歡樂の境を想出し、茫然と佇立んで居た。

突如雅子が來た。何か用事があつて通り掛つたものらしかつたが、  
生憎古暮が椽側を閉塞して居たので、少しく閉口の體である。

古暮は氣が著いて道を開いてやつた。けれども雅子は遠慮してウジ  
くして居る。そして羞らひながら、

『嗚お草臥れてございませう』

『いやもう宛て身體は綿の様です』と古暮は早口に答へる。



『明日は東京へお歸りてございますか』  
『は、さうです』

『こんな田舎へお泊りては嘸お淋しいてせう』

『いやなに、田舎で育つた者ですから淋しいことなんかありません。然し學生時代から久しく東京に居りましたから、今でも何方かといへば賑かな方が良いです』

『妾も矢張左様思ひますわ。學校で皆様と賑かにして居りました揚句、こんな淋しい所へ参りますと、夜などは眠られせんわね。一昨日妹の墓参に一寸家へ歸つたのですけれど、淋しくつて早く東京へ行きたくなりましたわ』

『はア左様ですか。して學校は何校ですか』と古暮志願兵は柱に倚つた。

『A町の女子學院でございます』

『女子學院ですッて。妙ですな僕の妹も其校へ通學して居ます』

『之』と雅子は目を圓くして、

『では、あの御名前は何と仰しやいますか』と訊く。

『名ですか。名は古暮綾枝』

『アアあの綾枝さんですか。彼の方妾の親友よ』

『それは實に意外な話ですな』

『まア、貴郎が綾枝さんの兄さんで入らッしやいましたか』と雅子



は不思議さうに目をバチ／＼して居る。

古暮も不埒面喰つた様子で、

『ぢや……』と話を繼がうとするとき、ガチャ／＼刀を揺がせながら小林軍曹が歸つて來た。

二人の親しげな容子を見た軍曹は、妬む様な自烈る様な形に、態と足音荒く座敷へ入つて、刀を抛り出し、自分は崩れる様に大胡座をかく。

雅子は聊か物おぢした様に、

『御免遊ばせ』と口の中で云つて、サツサと次の間へ入つた。そして覆のかかつた琴を抱へて又母屋の方へ行つて了ふ。

古暮は座敷へ入つて、

『何か命令がありましたか』と訊いた。けれども軍曹はそれに答へずに、

『外は寒い。流石に山國は冬が早く來る』

知らぬ顔して他の事を云ひ、火鉢を深く抱へて手をあぶりながら、冷めた茶を二三杯續けて飲んだ。

其の中に初年兵三名共湯から戻つて來た。軍曹威丈高になつて、

『今晚の命令。明日は午前六時の出發。皆其の積りて居ろ』  
不動の姿勢を取つて聞いて居た兵士は、

『はい』と謹んで答へた。



## (一の四)

主人が心盡しの珍味を載せた夕食の膳は女中の手に運ばれた。麥酒は幾本か栓を抜かれて並んで居る。

主人夫婦も座に侍つて、歡聲は室に溢れた。

暫くして、母屋の方から幽かに高く低く琴の音が通つて來た。雅子が彈き始めたらしい。

『や、是れは結構だ』

軍曹手を拍つて喜んだ。そして古暮の方を向いて、

『貴公麥酒もやらんのか』と尋ねる。

『少しでもアルコール分を含むものは降参です』

『なに降参だと。軍人が降参などして堪るものか。麥酒は水物だ。上を仰げば咽喉を通る。さ一杯』

小林軍曹自身て古暮の手を押へて注ぐ。洋蓋には白い泡が溢れた。

『これは弱つたな』と少し當惑の體で喰る。

琴は絶えず微妙の音を奏でて居る。

軍曹は大分酔を感じたらしい。例の銅羅聲で十八番の都々逸を始めた。

皆は可笑しがつて笑つた。

古暮志願兵は可笑しくも面白くも思はなかつた。實は先刻の一杯を



無理に乾したので頭痛がして来た。呼吸苦しい様な気がする。外へ出て冷たい風に當つたらと思つて、便所へ行く態をして、例の瀧の音の聞える廊下に行く。

雅子は其所の部屋で琴を弾いて居るのであつた。

古暮は其所まで行くと、目が眩つて歩けなくなつて了つた。仕方なしに廊下へベタリと座る。

琴の音がハタと止んだと思ふ間もなく、雅子が駈出して来た。吃驚した容子で、

『何誰様ですか、何うかなすつて……』と訊く。

『え、なアに』と古暮は不恰好な返事をする。

『アラまア、貴郎でしたの。何うかなすつて』

『ヤどうも』

『お酔ひなすつたのですか』

『……』

『お酔ひなすつたのなら寶丹でも上げませう』と云つて、雅子が自分分洋盞に水を盛つて来る。そして袋から寶丹を出してくれた。

『直に落ちつきますから……』

小さな七を白い指の先へもたせて、古暮の口へ運ぶ。

古暮は無言で嘗めて、一息に水を飲み下した。

雅子は背を撫てながら、



「向ふの部屋でお休みなさい。今お蒲團を延べますから。ね、さうなさいな」とすすめる。

「有難う」と古暮は感謝の意を表した。

「暫時静かにしていらっしゃい。直に治りますから」と云ひつつ奥の方へ行つたが、間もなく引返して来た。

「さ、それでは」と手を取つてくれた。

離家では俄かにドヤ／＼して、主人夫婦が駈出して来る。初年兵の高田も来る。

「何うしたんです」

「酔つたのですか」

口々に尋ねる。

雅子が答へて、

「少しお酔ひなすつた様ですが、もう良いのよ。妾が今お休みなさる様に向ふの座敷へお蒲團を延べたところなのよ」

「や、どうも飛んだお騒がせ申して済みません。なにもう大丈夫です」と古暮は稍醒めて来た。

「でも少しお横におんなすつた方が良いてせう」

「ぢや失禮ですが……」

古暮は高田と主人とに扶けられて寢床へ入つた。

雅子が襟の邊へ何か澤山押掛けて、枕の方をズット高くした。



『これで良いでせう』

『直に醒めますわ』

『御用がありましたらお呼び下さい』と各自に云つて立去る。

古暮は仰向いたまま、

『有難う、恐縮です』

(一の五)

霎時すると高田が駆けて来た。

『志願兵殿、軍曹殿が起きて来いと申します』

『僕に』

『は』と立つて居る。

『何だらう』

『何ですが。琴を弾くのを見て居るのかと云つて居ました』

『莫迦な。然し上官のお召した、直ぐ行くよ』

古暮はヤラ身を起こした。もう身體は確固して居た。軍曹は自分が雅子と恰も十年の知己の様になつたのを快く思はぬ爲め、或は自分が琴を弾くのを見に来たとて、思つたのかも知れぬ、と思ひながら行く。

軍曹も大分酔つたらしく、口吻が怪しい。

『こ、古暮志願兵。甚だ恐縮でござるがな、週番士官にな、い、異



「状態なしと報告して来てくれ」

「はら」

「でな、わ、我輩は病氣で報告に来られんからと云つてくれ」

「然しそれは困りますな。どうも病氣——虚偽の報告は出来ません

な」

「なに。今一度言つて見る」と軍曹の語氣は荒い。

「虚偽の報告は出来んと云つたのです」

古暮は屹となつた。

「失敬な」

軍曹勃然として起たうとすると、生憎酔つた身體の巧く重心が取れ

ぬので、バタリと其所に倒れた。危く火鉢の上へ倒れて、脛を傷つ  
けた。そしてサツと鮮血が流れる。

「あ痛ッ」と軍曹は顔をしかめた。

女中と兵士とは總立になつて介抱をした。

母屋の方からは、主人夫婦も雅子も吃驚して駈けて来る。

「小林軍曹殿。確りしなさい」と古暮志願兵は抱き起した。雅子は

白いハンカチーフを割いて繻帯をした

軍曹は無言で繻帯を眺めた。

「報告に行つて参ります」

古暮は悠然と刀を佩いて出掛ける。



(一の六)

間もなく古暮は戻つて來た。外の冷たい夜風に顔を吹かれたので、  
酔はスツカリ冷めて了つた。

玄關へ上ると、勝手の方から雅子が出て來て、

『何ですか、彼の軍曹の方怒つた様でしたわね。何か私共で不都合  
な事でもあつたのでせうか』と心配さうに訊く。

『なアに、何でもないんです』

古暮は更に氣にも止めて居ない様だ。

部屋へ戻ると、今酒を切上げて飯にしたところだと云つて居た。軍

曹は淺間しい姿で横に寝て居る。其の上へ外套が被せてある。何と  
なく戦場の死者が想像されるのだ。

『報告を了りました』と志願兵は云つた。

軍曹は其の儘で、

『む』と微かに答へた。

\* \* \* \* \*

翌朝は篤く謝して出發した。そして皆馬の口元を取つて、出發の令  
遅しと本部前に集合して待つて居る。

總て一聲の集合喇叭が朝の空気を振動して響いた。勇士は忽ち相集  
つて隊伍が整つた。



蹄の音は水霜の道に鳴つて行進が始まる。

小林軍曹古暮志願兵等の分隊は、今や昨夜泊つた家の前を通りつつあるのだ。

主人も雅子も門口に立つて居たので。志願兵は一寸目禮した。軍曹は振返つてニヤ／＼した。

(二一の二)

歸隊後は慰勞休暇が附與されて、行軍の勞は慰められたのである。今度の日曜には是非來てくれ、お願があるんだからと云ふ手紙を綾枝から受け取つたが、生憎古暮志願兵は週番勤務の見習を命ぜられ

たので、待ちに待つて居た日曜は、遂に外出が出来ずに了つた。

定めて綾枝は千秋の思ひで待つて居たことであらうと考へると、待ちあぐんで居る顔が想ひ出される。

次の日曜は朝から外出した。行軍後始めて綾枝に會ふので、珍しい話も澤山積つて居る。

綾枝が世話になつて居る家——S町の叔母の——に著いたのは未だ九時少し過ぎてあつた。遠慮の要らない家なので、案内も乞はずに綾枝の居間へ上つて行く。居間は二階の六疊だ。

綾枝は今机に對つて居たが、不意打を食つて聊か魔誤ついた。そして急いで座蒲團をすすめた。兄妹は同じ火鉢へ四つの手をかざした



のである。

『十月と来ちや火が欲しくなるな』

古暮は衣囊から巻煙草を出して吸付ける。綾枝は茶を入れて兄にすすめた。

古暮は更めて部屋を見廻した。本箱には整然と書籍が藏はれて、机の上には二三冊の洋書が重ねてある。本箱の上に美しい花籠が置かれて、柱に懸けた紫紺の袴が低く垂れて居た。

『此の花籠はお前が造つたのか』と古暮は其の花籠に眼を著けて云つた。

『いえ、雅子さんが造つたの。それを妾戴いたのよ。良く出来て

るわね』と綾枝も其の花籠を見ながら云ふ。そして兄の顔を見守つて微笑む。

『兄さん雅子さんのお宅へ泊つたッてね。行軍の時ですッて……』

昨日も學校で午飯の時其の話が出てよ』

『あア大變世話になつたよ』

『兄さんが酔つて困つたッて……』

『ハ、ハ、』

『ホ、ハ、』

兄妹互に可笑しがつて笑つた。

『兄さん、昨日も雅子さんが其の時の事を話して笑つたのですが、



何だつて平素お酒嫌ひの兄さんが其様に酔つたらうと思ふと、不思議でならなくツてよ』

『詰まらん事を不思議がるな』

『だつて……』

『だつて何うしたのだい。女と云ふ奴は何故さう詰まらん事を笑ふんだらう』

綾枝は遮つて、

『もう良いことよ』

古暮は急に思ひ出した様に、

『お前は何時か、願があるなんて手紙を寄越したが、又シヨール

のお願いだらう』と稍冷笑的に笑つた。

綾枝は急に眞顔になつて、

『そんな事ぢやないのよ。兄さん後生一生のお願いですから諾いて頂戴な』

意外にも態度が何時もと違ふ。古暮も聊か魔誤ついて、

『ぢや話すさ。話さんでは何んなお願いだか解るものか』

『では申上げますよ。諾いて頂戴な』

綾枝は急に改まつた。兄は何事かと始めて眞顔になる。



平井某と云ふ男が深く雅子の才色に惚れ込んで雅子の両親に迫つたのであつた。平井は名門の嫡子であるので、両親は直ぐ承知したが肝腎の雅子は絶対に嫌つた。両親は怒つて雅子への學資を止めた。覺悟の上とは云ひながら雅子は大に苦んだ。伯父に頼んで見たが埒が明かない。思ひ餘つて親友たる綾枝に事の次第を打明けたのである。綾枝は此の親友の苦難を傍觀することが出来ず、遂に學資の立替をしやうと決心した。けれども修學中の綾枝には力及ばぬ事であるから、兄に縋つて其の學資の供給を願ふ次第である。

綾枝の話は右の意味であつた。そして、  
『あんな男に添ふくらぬなら寧ろ一思ひに自殺するツて、雅子さん

はホロ／＼涙を零しながら云つてるんですもの。妾だつて黙つて見ても居られないぢやありませんか』と口を結んだ。

古暮は火鉢に翳した手を急に胸へ組んで、熱い吐息を通はしたが、何とも云はなかつた。

綾枝は尙舌を舞はして、

『ですから妾、何うしても救つてあげねばならなくなつたの。……妾も一緒に泣かされて了つたわ』と勉めて同情を求める様に言ふ。古暮は沈思の顔に淋しい微笑を浮べて、

『だつて困るな』

云ひも了らぬうち、



「では妾、雅子さんに合す顔がないのよ。一旦何うかしませうと約束したのであるもの……。ね兄さん」と綾枝は猫の媚ぶるが如くに迫る。

「幾何あれば間に合ふんだい」

「さうなれば雅子さんも寄宿舎から引取つて此の家で寝起をする様に叔母さんにも願つたから、ほんの些少あれば良いのよ」  
古暮は一寸考へて、

「よし、僕は妹の爲めに用達てやう。それでお前の顔も立ち、雅子さんの希望も成立つんだな」と云ふ。

綾枝は感謝の色を頬に漲らして、

「有難う。妾眞實に嬉しいわ。雅子さんの喜ぶ顔が見えるわ」と兄の顔を見上げるのであつた。

「然し綾枝、此の事はお前も秘密にしておいてくれ」と何をか憚る様に云ふ。

綾枝は怪訝の眉を顰めて、

「秘密にですつて……。」と訊く。

「何でも良いから僕が用達てることだけは秘密にしてくれ。若い僕が若い雅子さんに對することだもの、誤解されると困る」  
古暮は云ひながら又煙草を喫む。綾枝は未だ不服らしい顔をして居たが、急に笑ひ出して、



「良い事よ。兄さんが承知して下すツたのですもの、兄さんの云ふ事なら妾何でも聞くわ」と美しい齒を見せた。兄に酷く似て色の白い、髪の豊かな、何所ともなしに人懐ツこい娘である。

古暮は急に時計を出して見て、

「もう十一時になる。久し振りの外出で用事があるから僕は歸るよ」と立ちかかる。

綾枝は驚いて、

「アラ兄さんモウ歸るの。では妾も御一緒に掛合せよう。一刻も早く雅子さんに安心さして上げたいから」と立つて袴を取る。

古暮は座敷の中を歩きながら待つて居た。

「どうせ、直ぐ別れるんだけれど、まあ其所まで御一緒に行きませうね」と話しながら袴を穿いて、一寸懐中鏡を出して髪を撫てまはす。

「早くせい。女と云ふ者は何うしてさう暇が取れるものかな」と兄は促し立てて二階を下りた。

(二一の二)

古暮清は妹と別れて電車の喧しい響を聞きながら大道を歩いて居たが、もう十二時近くなつたので、唯ある牛肉屋を見つけて上つた。



女中が、

「入らッしやい」と仰々しく云つて二階へ案内する。

隣の部屋には先客があるらしく、銚子の音などとして、肉の煮える香がブンと鼻に来る。

古暮は静かに足を運んで、縁の擦れた畳の上に座つた。女中は詔へ物を取りに降りて行く。

「妙な事もあるものだなア」と急に隣の部屋で聞き覚えのある聲がした。

「全く妙だ。二人共同じ女に戀をして俱に敗れて、そして今日圖らず此所で酒を飲む。小説の様な話だな」と今度は別の聲である。

「僕は必ずしも未だ敗衄の恥はかかんよ」

確かに小林軍曹の聲である。古暮はドキリと胸に徹へた。動悸を押へながらソツト襖の隙間から覗いて見た。

意外なる哉、小林軍曹が一人の青年と飲み交して居るのであつた。

先方は古暮が居るとは夢にも知らず、尙も話を進めるのである。

「然し君だつて無論駄目だよ。一體彼の雅子と云ふ女は決して莫迦ぢやないんだ。見給へ、彼は女子學院中の花だぞ。子爵夫人にするからッて口説いた華族の莫迦息子さへあつたくらゐだが、不思議に未だ本望を遂げた者がないんだ。振られた女を賞めるのも氣が利かんなが、實際少し變つて居るよ」



「む。ぢや僕も絶望だな、平井君」

先刻綾枝から聞いた平井と云ふ男は、あんなイケ好かん男であるかと、古暮は思はず微笑んだ。けれども聞く事總て意外なので、呼吸を凝らし目を圓くして黙つて聞いて居る。

「まア絶望だな。潔く諦め給へ」

「大に」と小林の間が抜けた様な聲がしたとき、女中が誂への肉と飯とを持つて来て其所へ置いた。そして瓦斯に火を點じて肉鍋を乗せ、肉を入れて行つて了つた。

古暮は心ここに在らざれば、鍋の焼けつくのも知らずに耳を欬てて居た。

「然し彼の女も彼の齡になつて、満更男が嫌ひてもあるまい」

「勿論さ。彼だつて意中の人は確かにあるよ」

「君はそれを知つとるのかい。驚いたな。其の男は一體何者だ」

「僕の中隊の志願兵さ」

「何と云ふ男かね」

「古暮清と云ふ男だ」

古暮の胸には、何物にか刺された程に徹へた。ガンと一つ頭を叩かれた様に耳鳴がした。

「ふむ。其の男とは永い間の關係かい」

「いやなに、此の間行軍の時一泊してからの事さ。雅子の方で大分



熱くなつてゐる様だよ。それで其の古暮は早稻田出身で、稍訥辯ではあるが才氣は充分にある。男振も可成整つて先づ美男子の方だね。家は素封家で、亡父が代議士であつたから地方では幅が利くんださうだ。それに妹が居て雅子と同じ學校だから、それが何でも連絡を取つてゐるらしいんだ』

軍曹の語る聲に續いて、對手のホツと云ふ溜息が聞える。

『よし、どうせ焼糞だ。それが事實なら大に妨害してやらうよ』と云ふ平井とかの聲がした。

古暮は其の場へ打つて出て彼等の迷を晴らしてやらうかと思つた。然し徒らに彼等の反抗心を高めるに過ぎぬと悟つて思止つた。

『よからう』

『ぢや君は隊内の男を監視し給へ。僕は雅子に注意する』

『よからう』

『よし、決つた。ぢや、も一本』

ポン／＼手を叩いた。

女中は聲に應じて上つて來た。

『酒を持って來い、肉もどツさり持つて來』

『どうせ自暴だ。大に飲め』と凄い勢である。



其の後幾日か経つての水曜の夜であつた。

古暮は一寸下士集會所へ立寄ると、其所には二三の一年志願兵が麥酒の盃を舉げて居た。電燈が華かに照つて伍長階級の肩章が光る。古暮の姿を見るや、

「オイ一杯やらんか」と一人が呼びかけた。

「僕は不可。酒はモウ懲々だ。行軍のときスツカリ參つてしまつたもの」と古暮は横に手を振つた。

「まあ良いから此所へ來い」と他の一人が立つて手を取る。古暮は仕方なしに其所の空椅子に倚つた。

「いくら不可からッて盃だけは取り給へ」と洋盞を出す。

『不可々々』

『不可も何もあるものか』と無理やりに注いで、

『酔つても良い。飲め。酔ふと又行軍の時の様に美人に介抱して貰へるかも知れんぞ』と一人が揶揄ふ。

一人が之に和して、

『袖擦り合ふも多少の縁とは好く云つたものだ。古暮もそれ以來、オホン』と煙草に染まつた齒をむき出して笑つた。

『莫迦な事を云ひ給ふな。僕なんぞは清潔なもんだ』と注がれた洋盞を取りもせず古暮が云ふ。

『莫迦な事どころぢやない。大分熱くなつて居るさうだ』



『好男子は振つたものだ』  
口々にひやかす。

『諸君卑劣な事を云ひ給ふな。僕だつて軍人だぜ。それに唯一度見たばかりの女にラヴするなんか、無理に強ひられても出来んぢやないか』と古暮は笑ひもしない。

『ハ、大層眞面目だな。然しまア何にしても君は幸福だよ』

『期せずして相思ふ。人から勧められも何もしないで互に戀ふ。僕は是れ程神聖な事はあるまいと思ふよ』とニヤ／＼しながら益々笑ふ。

『さうだとも。古暮君宜しく愛してやるべしだ』

『然り。かよわき者よ、汝の名は女なり』  
古暮も今は黙つて聞いて居られなくなつた。

『おい／＼。下らん話は止してくれ』

『なに、止してくれかな』

『だつて事實ぢや仕方あるまい』

泡立つ麥酒をあほりながら散々に噓し立てる。

『そんな無根な話を公然話し合つたら、將來の豫備將校たる我々志願兵の體面にも關するだらう』と古暮は堪りかねて云ひ出した。

『いや恐れ入つた。然し君が頻々其の雅子とか云ふ美人と會見するのは事實だらう』



『それは無論さ。小林軍曹が君對雅子の關係を熟知して居て素破抜いたのだもの……』

『何、小林軍曹が……』と流石の古暮も思はず眉をビリリとさした。

意地の悪い小林が我を苦める爲めに、早くも我が志願兵間に針小棒大の説を流布して居るかと思ふと、熟々口惜しくなつた。

(三三の二)

下士集會所で意外にも等輩の擲擲を受けて、古暮は不快な顔をして我が室へ歸つて來た。

と、當番が早速傍へ來て、

『古暮志願兵殿、貴下に手紙が來て居りましたが小林軍曹殿が持つて行きました』と云ふ。

古暮は不審に思つて、

『何だつて』と訊く。

『何故ですか、預つて行くつて。そして歸つたら下士室へ來いと云つて行きました』と答へる。

『さうか』

古暮は又何か文句を並べられるのだらうと考へた。けれども上官に對しては反抗も出來ず、仰せの儘に下士室へ行く。



下士室には電燈が點つて、寢臺の赤い毛布が目立つて美しい。軍曹はヤラ身を起こして、

『ははア来たか、此所へ来い』と椅子をすすめる。

古暮は云ふがままになつた。

『古暮志願兵、貴公は情婦を持つとるな』と峻しい眼で云つた。

古暮は事の意外なのに驚いたが、直ぐ彼の肉屋の事を思ひ出して、それと悟つた。そして態と沈著いて、

『失禮ですが私は、生れてから未だ情婦など拵へた覺えがありません』

云ひも終らぬうち、

『嘘をつけ。自分は丁と知つとるぞ。將來の豫備將校たる志願兵が

以ての外だ』と怒鳴り付けた。

古暮は聊か驚いたが、端然と不動の姿勢を取つて、

『私も軍人です。有るものを無いとは申しません。無いから無いと申すのです』

重い口調ながら言語は明瞭である。

『よし。無ければ是れを読んで聞かさう』

軍曹は机の抽斗から一封の手紙を出した。

『む………貴郎様の御厚志により………終生忘れ申すまじく………厚く御禮申上候………何時か御目もじの節申上ぐへく………何



だ是れは、大分長いが横文字だの○だの△だのが使つてある。終りに雅子よりと書いてある。是れでも關係がないと言ふか。無ければ無い様に辯明しろ」と其の手紙を机の上へ擴げて睨む。

古暮は當惑した。明快に事の頭末を語つて迷ひを解かんか、雅子の恥を晒さねばならぬ。事を覆はんか、屹度殿しい詰問を受けるであらう。胸中は甚しく混亂した。けれども暫くして古暮は意を決した。嚴然として、

『雅子は妹の親友です。それ以上の關係はありません』と男らしく云ひ放つた。

軍曹の額は見る／＼青筋が張つて、

『なに。貴様舌を二枚に使ふな、先刻は關係がないと云ひながら、今は妹の親友などと云ふ。何だ其醜態は。男らしく情婦だと云へ』  
其の聲が天井にビリ／＼と響いた。

『いくら何と仰しやつても情婦で無いものを情婦だとは申されません』

依然古暮は冷靜である。軍曹は急に冷笑を浮べて、

『情婦ぢやないが心安いんだな』と氣味の悪い事を云ふ。

『妹の親友だからとて、私まで心安いと云ふわけはありません』

『何だと』

『……………』



軍曹床をドタンと一つ踏んで、

「未だ事實を吐かんか」とさも自烈たさうに怒鳴つた。

「何と仰しやつても事實でない事は事實ですと申上げられません」

「貴様上官に抗辯するか」

上官の一語に對しては、古暮は何とも云ふ言葉がないのであつた。

軍曹は虎の威を藉る狐の如く、

「貴様の様な奴が軍人社會に居るとは以ての外だ。苟も一年志願兵

たる者としての大屈辱だ」と呼はるのである。

けれども古暮は、大理石像の様に突立つた儘身動きもしない。

「情婦の手紙を隊内に入れるなら斯うしてやる」

軍曹はバリ／＼と手紙を引裂いて煖爐の中へ投げ込んで了つた。

(四の二)

等輩の嘲罵と上官の叱責とを買つて、古暮は端なくも繼子扱ひを受くるに至つたのである。

同僚は深く事實の如何をも究めずに、古暮の姿を見る度、何時も擲ゆの矢を放つのである。古暮は如何にもそれが苦痛であつた。幾度か彼等の誤解を解かんと口を極めて辯明したが、何時も冷笑の裡に葬られて了つた。

たま／＼外出すると、小林軍曹は勿論、同じ志願兵の誰彼も、岡焼



半分後を跟けるので、外出も仕悪くなつた。寧ろ事件の顛末を發表して、曲直理非を明かにしてやらうかとも思つた。が、流石にそれも果さずに了つた。月の冴えた晩などは營庭に出て、横に曳く影を踏みながら英詩など低唱して、僅に心を慰めて居た。

其の中に十月も暮れて段々寒くなる。應て天長節も芽出度済んで、満期除隊の噂のみ營内で幅を利かす頃となつた。

小春日和の午後、折柄の日曜を幸ひ、久し振りに植物園でも見舞つて、清艶なる温室の花の香を嗅ぎつつ、心ゆくばかり温かさ自然の懷に憧憬れやうと、重き刀を引摺りながら電車に飛乗つた。

意外なる哉、綾枝が電車の一隅に座を占めて居た。五月蠅く誰彼に批評せらるる其の疑の根を絶たんが爲め、満期までは一切顔を合すまじと心に誓ひしに、今端なく此所で綾枝に會つたのである。然し流石に血を分けた兄妹、言葉を交さずに居べくもあらず。

「アラ兄さん」と綾枝は早くも聲をかけた。

古暮は無言の儘、妹の傍の空席に腰を下した。

「兄さん何所へ入らッしやるの」

重ねて綾枝は問ふのであつた。

「植物園」

「植物園ですッて。妾もよ。妾雅子さんと一緒に花籠を拵へるの」



『さうか』

『そして展覽會へ出すのよ。温室の花を寫生する積りですわ。ては兄さん御一緒に参りませう』

古暮は否みも兼ねて首肯いた。

電車は閑静な街へ入つてから速力を速めた。往來の人々を後方に瞠若たらしめて矢の様に走る。

間もなく植物園の入口に着いた。其の時分には兄妹の外、二三の乗客が暇さうに座取つて居るに過ぎなかつた。

綾枝が降りる。清も續いて降りる。綾枝が小刻みに編上靴を鳴らせば、古暮は疎らに力ある靴の音を冠せて門を入るのである。

園内は秋も名残の凋落の梢を見せて、閑雅な小徑の彼方には、微かに鳥の轉聲を聴く。

杖を曳く紳士、愛嬢の手を取る奥様、其等の影も極めて稀にして、ただ寂びたる晩秋の悲みと、落葉の音の淋しさのみが、犇々と身を包むのである。

『兄さんは何故お遊びに入らツしやらないの』

綾枝は何を思ひ出したか斯う訊いた。古暮は少々魔誤ついて、

『何でもないが……矢張詰まらない事を好んで云はれたくないからな』と良い加減に云ふ。

『詰まらない事ですッて……』



綾枝は腑に落ちぬ態。

「軍曹——彼の小林軍曹が莫迦に僕に注意してるんだ。此の間なん

か、雅子さんから来た手紙を焼かれたよ」

古暮は萬感胸に迫つて、思ふ事も僅に其の一斑を語り得るに過ぎず。

「アラ、あの髯もくの軍曹がですか。まア」と呆れて、

「彼の人餘程可嫌な人よ。雅子さん大變怒ってるわ」

(四の二)

綾枝は語を續いて、

「此の間、叔母さんと雅子さんと妾と三人で寄席へ行つたの。する

と平井と云ふ可嫌な男と彼の軍曹と二人が居て、そして雅子さんに話なんか仕掛けたのよ。雅子さんは嫌がつてトウ／＼途中で歸つて了つたわ。其の後で、嫌な文句ばかり書いた艶文を寄越したが、雅子さんは碌に見もしないで焼いて了つたのよ。それから十日許り経つて、學校の歸途に又行き會つたんですよ。すると此の間の返事をくれッて云つたものだから雅子さんが怒つて、失敬な、彼んな手紙の返事を上げる暇はありませんと斷乎謝絶つたわ。さうすると彼の軍曹が威張つて、散々妾等に悪口を云つたのよ」と如何にも憤慨に耐へぬらしい口吻である。

「さうか。小人は宜しく敬して遠くへしだ」



古暮は極めて冷静な態度で斯う云つた。綾枝は應て考へ直したか、  
『もう良いわ。兄さんだつて直き満期になるしね……』と何やら  
自分獨りて飲込んで居る。

古暮は熟々軍曹の行爲が憎くなつた。然し満期は既に眼前に迫つて  
居る。若し留營を命ぜられるとも、其の曉には見習士官となるので  
ある。彼等に指一本指させはしない。何うしたところで此所一月足  
らずの中には新しい幕が明くのであると、心ひそかに喜んで居る。  
二人の間に沈黙が稍永く續いた。そして足並が少しく早くなつて、  
兄妹の影は整頓した園内を運ばれるのである。  
観覧の人は疎に、園丁の花弁に手入する聲が著しく聞えるのであつ

た。

折から太陽面に白い雲が掛つて、四邊は淡く翳つて來た。  
と、綾枝は何物を見出した様な眼附で、

『兄さん一寸待つて頂戴』と可笑しな手眞似で制す。彼は彼方に温  
室の花を寫生しつつある雅子の影を認めためたのであつた。

古暮は無言の儘それに従つた。綾枝は兄を抜いて先へ行き、前方の  
灌木の常盤木を楯にして忍び寄る。古暮は笑ひをこらへて、靜かに  
歩を運ぶのであつた。

綾枝は雅子に接近した。雅子は一心に五彩の絲を白い指先で運んで、  
葉が編まれ、花瓣が編まれ、美しい花の寫生を試みて居るのである。



漆黒なフツクリした髪には純白のリボンが翻つて、襟足の羨しい程の白さ。夕日を背にして、秩父銘仙の著物がシツクリ似合つて居る。綾枝は靴音を殺して後に近寄ると、綾枝の影が雅子の上に投げられた。雅子は吃驚して立上りながら振返つた。そしてベンチの傍でよろめきつつ、

「アラ、お人の悪い。妾吃驚したわ」と美しい笑顔を作つた。

で、後の方に古暮が居るのに気がついて、一層驚いた容子で、

「綾枝さん、まア兄さんを……」と忽ち頬には紅潮を漲らした。

「古暮さん、お久しぶり……」と雅子は丁寧に頭を下げた。

古暮は仕方ない様な風で、

「や、何うも」と近寄るのであつた。

雅子は編みさしの花を丁寧に風呂敷へ収めて、

「先日はどうも……」

幾つか頭を上下して、厚く禮を述べる。

「いや、どうか其の事は言はずに」と古暮は簡単に頭を下げて、

「まア掛けませう」と無難作に雅子が今迄居た腰掛に腰を下して、

衣囊から巻煙草を出して口に啣へた。そしてマッチを探したが見當らない。困つた顔をして火の無い煙草を啣へて居る。

「マッチでございませうか」と雅子が云ふ。

「妾、買つて来て上げるわ」と慧い綾枝はモウ駆け出して何所かへ



行つた。  
後には古暮と雅子とが、同じベンチに並んで腰を掛けて居るのであつた。

(四の二)

「貴郎暫くS町へ入らッしやいませんでしたわね」

雅子は暫く経つて斯う云つた。

「は。或る時期までは全くお目に掛からん考へだつたのですが、偶然今日は會つて了つたのです」と古暮は彼方の花園を見て居る。  
雅子は燃ゆる様な目を古暮の顔に集めて、

「だつて入らッしやつても良いではございませんか。妾も先達から飛んだ御厄介になつて、姉妹同様にしていただいて居るのです。他所ぢやなし、綾枝さんの所へ何程入らッしやつたつて不思議はございませんまい」と浴せた。

古暮はニヤリ笑つたざり、何とも云はなかつた。

「ね、さうてせう」と雅子は熱烈な匂の満ちた紅の唇を翹してあまえる様に云ふ。

宛も露を浴びた可憐の海棠が豊榮昇る朝日に映するが如き嬌態である。

然し古暮は之が爲めに心を動さなんだ。彼が艶麗なる花の香を以て



媚ぶれば、此は晃々たる劍の權威を以て對す。

『いや、不可です』

如何にも嚴然たる態度であつた。が、俄に話調を轉じて、

『時に御兩親との御關係は復舊しさうですか。なに實の親子の間柄ですもの、御心配はないでせうが……』と別の方へ持つて行く。

『はい、母は何と申しても女ですから、其の後も手紙だけは内證で往復して居ります。小使なんかも時々送つて寄越すのでございますが、父には頑固で困つて了ひます』と急に俯向いた。

『さうですか。然し貴女が撓ます勉強をしていらッしやれば、何時か御父様のお心も解けますよ。御安心なさい』

古暮は背を撫でんばかりに慰めてやる。

『有難う』と雅子は低い聲で云つた。

俄に足音がして綾枝が戻つて來た。

『倅大急ぎよ。汗がビツシヨリだわ』

『御苦勞』

『暑かつたでせう』

笑聲話聲が相混亂して急に賑かになつた。

古暮はマッチを擦つて煙を吐きつつ、時計を出して見て、

『や、五時だ。もう歸らんけりや不可ん』と刀を振り直して立ち上る。



「アラ、もうお歸りなさるの」と雅子は慌てて云つた。

「歸らんけりや、歸營時間に遅れます」

「だつて……。ては其所まで御一緒に参りませう」

「妾もよ……」

兩女も立ち上つた。

「いや、僕は先へ失敬します」

古暮は備錠の孔を一つ進めて、身を構へた。

「ては一寸……」

雅子は何か言ひたげな容子。

「兄さん御一緒に行くぐらゐ良いでせう」と綾枝は詰るが如くに

云つた。

「いや、お話は後日承りませう」と、古暮は脱兎の如く兩女を抜いて門を出た。

秋の日は街の藁の上に低く落ちて、赤く光つて居る。

(四の四)

Y町の唯ある角で電車を降りると、幸か不幸か、出會頭に小林軍曹が例の平井と手を連ねて逍遙して居るのに出會つた。

「や、古暮志願兵」

先方から言葉をかけられた。何所かで一杯飲つて來たと見えて酒臭



い。古暮はハツとして急ぎ敬禮を行つたが、逃げるにも逃げられず困つて居る。

「まあ良い所で會つた。何所か一杯飲らう」と小林は片手を古暮の肩に掛けた。平井は黙つて洋服の塵を拂ふ。

「もう歸營時間ですから、今日は御免を蒙りませう」と古暮は謝罪の様に云つた。

軍曹は冷笑を片頬に浮べて、

「歸營には未だ早い」

「然し、今日だけは失禮します」

「なに失禮する。怪しからん男だ」

稱言葉に針を現して來た。

「何卒放して下さい」と古暮は小林の手を解いた。

「貴君、上官の云ふ事です。小林軍曹の言葉に従つたツて差支はありませんまい」と平井が横から嘴を入れた。

「さうだとも。上官と交際の出来ん様なヤクザ野郎ぢや軍人の面汚しだ。何うだ古暮。我輩が奢るから此方へ來い」

侮辱の炎は漸く揚つた。

古暮は屹となつて、

「何と仰しやつても御免を蒙ります。私は歸營時間に遅れて迄も上官の意を迎へ様とは思ひません。小節の信義を立てんとて大綱の順



逆を誤るなどは、陛下が宣うて居られます』と云ひ放つた。そして  
 駈歩で薄暮の街へ消え失せた。  
 後で二人は散々に罵倒してゐた。  
 古暮は漸く虎口を逃れて、五川の橋まで来ると、突然一人の少女が  
 飛びかかつて、ワツと泣き出した。  
 仔細は解らぬが、年頃十六七、田舎者らしい。手織の袷に同じ羽織  
 を重ねて、風呂敷包を抱へて居る。  
 古暮は驚いた。心臓の鼓動を抑へながら、段々訊いて見る。  
 女はシク／＼泣きながら、市内の叔父を尋ねて上京したが、宿所も  
 解らず困つて居るところへ、或る親切な人があつて、奉公口を探し

てくれると云ふことゆゑ喜んで居ると、案外變な所へ追込まれやう  
 としたので驚いて逃出したが、もう一夜を明かすべき旅費もない始  
 末に、寧ろ自殺しやうと思ひ詰めて来たものの、流石故郷にある老  
 母の事を思ふと投身も出来かねて、思案に餘つたゆゑ斯く願ふので  
 ある、との意味の話をした。そして、  
 『誰も頼む人がありませんから、兵隊さんなら大丈夫だらうと思つ  
 て……』と如何にも田舎娘らしい事を述べ足した。  
 古暮は無言の儘聴き了つて深い吐息をした。實は古暮も當惑したの  
 である。斯うしてグヅ／＼して居ると歸營の時刻に遅れる。遅刻し  
 たが最後、營倉入の不名譽を負はねばならぬと思ふと、忽ち奈落の



底へ落りて行く様な気がしたが、屹度なつて

「ぢや兎も角も私と一緒に來給へ」

すすり泣く少女の手を取つて、交番へ行くべく歩き出した。

少女は袂で顔を蔽ひながら。足元危く従ふのである。

何時しか街は夜の帳に蔽はれて、萬物悉く色なき色に包まれて居

る。都會の女の脂粉の匂と、絡繹たる車馬の往來の塵の中に、電燈

の光が懶げに街頭を照して居る。

古暮は少女をいたはりつつ横町を出ると、バツタリ憲兵に行き會つ

た。憲兵は雀を狙ふ鷹の様な眼をして古暮を咎めた。

「貴郎は何所へ行きます」

「は。今交番へ行くつもりだつたのです。此の娘が、今夜を明かす  
べき宿もないので助けてくれと云ふのです。實は投身の覺悟もあつ  
たので、容易ならん事ですから……」と答へた。

憲兵は默然として聽いて居たが、

「ははア左様でしたか」と云ひつつ手帳を出して、始終を調べた。

其の中に點呼の喇叭が鳴るべき時期は過ぎたのである。けれども古  
暮は、もう覺悟を決めて居るので少しも噪がぬ。

(四の五)

娘を憲兵に引渡して、營門さして急ぐ。



M坂まで来ると、折からの夕闇を突いて陸軍の提燈が来る。古暮は之を見るや、自分を尋ねる爲めに隊から兵士が来たのだらうと悟つた。段々近づくと思はれてさうであつた。小林軍曹が一人の兵士を引率して来るのである。

「古暮志願兵か」と小林軍曹が例の銅羅聲で呼はる。

「は、左様です」と古暮は沈著いて答へた。

「今まで何所に遊んで居つた」

「遊んで居たのではありません」

「遊ばんで何して居つた」と語氣は稍荒い。

「投身しやうとする少女を助けられた爲め遅くなつたのです」

「虚言吐け」

「いえ事實です」

軍曹は冷笑を浮べて、

「少女の名は雅子と云ふのだらう」と反り身になる。

古暮は平然として、

「名は知りません。憲兵に引渡して来ました」

「貴様は、よくも上官を愚弄するな。少女を助けたなんて出鱈目を云ふな」

「出鱈目は申しません」

「高田打て………。先刻會つたときは何と云つた。其の口の未だ乾



かんうらに此の醜態は何だ』  
兵士は流石に打ち兼ねて居る。

「憲兵の證明があります」

「何でも良い。早く行け」

軍曹は聲を荒らげて一つ古暮を蹴た。

古暮は罪人を扱はれる格で、仕方なしに先へ立つ。小林軍曹と高田

と云ふ兵士とは兩側に之を監視する。

空は美しく晴れて、星も降りさうに澄む。風はないが、東京の夜は

霜を結んで、往來の駒下駄の音がカラコロと顫へる。

營内に歸つても、彼の證明書が効をなして、營倉に繋がるるところ

か、却つて其の處置の機宜に適したを賞美された。  
古暮の蹉跌を見て、大に喜んで謳歌した彼の小林軍曹は、定めし開  
いた口が塞がらなかつたであらう。

(五の二)

終末試験が済むと、古暮は最優等の成績で留營を命ぜられ、見習士  
官を拜命した。皆は彼が意外の出世を祝すると共に、驚嘆の目を睜  
つたのである。

斯うなると、小林軍曹との地位は全く轉倒した。其の後軍曹は公務  
の外は、努めて古暮を避ける様にする。



彼は是するうち新年になつた。芽出たいくと言つて居る間に、はや生温い春風が吹いて、梅の蕾も綻びやうとする時節になつた。綾枝から度々手紙が來たが、満期の後まで待てと云つて、古暮は更に行かなかつた。

或る土曜日の晩、母が上京して泊つて居るから明日は是非來てくれといふ綾枝の手紙を受取つた。

翌日は學友が三重縣へ赴任するのを見送りかたぐ、早く營門を出た。そして先づ叔母の家へ立ち寄つた。

叔母は築庭の日向で髪を梳つて居た。母はと聞くと、

「何です、清さんは可笑しな事を云ふのね」と笑つて居る。

古暮は狐につままれた様な氣がして莫迦らしくなつた。さては綾枝奴一杯食はせたなと勘附いた。それで其の儘直に歸つて了はうとした。叔母は慌てて引き止めて茶を入れた。二階では雅子と綾枝との笑聲が洩れて居る。

「實はね、貴郎が薩張來てくれないから、綾枝さんと相談して嘘を吐いたのですよ。まあ怒らずに話をお聞きなさい」と叔母は説く。

古暮は腕を組んで啞然として居る。

「あのね、是非聞いて貰ひたいと思つて……」と叔母は前置をして先日雅子の母が娘の容子を知る爲めに上京し娘から委細の話を聞いて感激した事、平井が危く刑事上の罪人とならうとして——失戀



の結果墮落して遂に友の時計を盗み——助かつたことが新聞紙上に表はれて頑固な父も後悔した事、今後は雅子を立派に卒業させることになつたと云ふ事、雅子の母が涙を浮べて頼んで行つた事など、何呉れと物語つて、

「だから、貴郎が少尉になつて歸る頃には彼の娘も卒業するし、何しろ彼の通り何所から見ても瑕のない子だから、貴郎には極良からうと思つてね」

稍間を置いて、

「もう内々貴郎のお母様とも相談したの。綾枝さんは、今でも姉妹同様なのだからッて喜んで居ます。お墓の下のお父様も屹度お喜び

です」と叔母は既にさう決めて了ふ。

古暮は困つた顔をして、

「然し叔母さん、少し考へさして下さい」

「考へるも何もないぢやないかね」

「然し、縦ひ口約だけでも現役中にするのは氣が濟まんです」

「オヤ、何を言つてるのです。だから満期の後と云つてはありませんか」

「まア叔母さん、其の話は今日は止して下さい。僕は友達を見送りに行くのですから失敬します」と席を離れる。

叔母は頻りに止めたが、古暮は背かんで獨り玄關へ飛出した。其所



には雅子が何時の間にか来て、袖を噛んで居た。

「アラ、もうお歸りですか」と、さも残惜しさうに一步摺寄つて、

「あの……」

雅子は何か云ひたげてあつたが、口を嚙んで了つた。

「何か用事ですか」と古暮は問ひ返す。

雅子はサツと満面に紅葉を散らして、

「此の間母が参りました……」と言葉は途切れる。

「は、其の事ですか。今叔母から種々聞きました。然し僕は困るて

すな」と軍刀の帯革を締めながら云ふ。

「……」

雅子は又袖を啣へた。

「僕は後悔して居るのです。少し許りの義理が斯うした縁の端となつてお互に心を苦めるのを悔いるのです。如何てせう、一切何も無い昔に復らうてはありませんか」

「では、妾がお氣に召さぬので……」と早や涙を浮べて居る。

「いや其んな事は毛頭ない。唯時期が早いと云ふだけなのです」

「時期が」

「は。時期さへ来れば僕は満身の愛を貴下に捧げます」

雅子は急に滴るばかりの笑を浮べて、思はず戎衣の袖に絶り著き、

「其のお言葉を伺へば、妾は十年でも待つて居ります」



## (五の二)

古暮は親友の榮進を神奈川驛まで送つて歸途に上つた。途上種々の事がとりとめもなく胸に浮ぶ。雅子が熱烈なる戀を拂ふに忍びずして、遂に未來を約したことが、刻々頭を刺す。幸福の様な、恥辱の様な、雑多の考へが千鳥の様に群れては散る。

日脚が未だ高いから蒲田の梅林を訪ふたが、花は未だ稍早かつた。餘り日和が麗はしいので、八幡の濱をブラ〜と逍遙した。

房總の山々は紫に霞んで、油の様な東京灣には、鷗の様に白帆が這る。

古暮は松吹く風に耳を澄しながら砂地を踏む。

と、彼方に幾人かの人が集つて居る。古暮は何氣なく其所へ行つてみた。巡查も居れば陸軍の兵士も居た。又若い女も居る。其の周圍を彌次馬が圍んで、

『なんだ〜』

『兵隊が女學生を追ッかけて來たんだとよ』

『いやさ、怪我をさせたんだ』

口々にワヤ〜云ふ。巡查が『コーラ』と叱ると、見物はサツと退くが又集る。

古暮は何事かと近いて見ると、豈圖らんや、巡查に詰問せられて居



るのは小林軍曹と平井で、女は雅子と我が妹の綾枝とであつた。古暮の驚きや知るべしである。目敏くも綾枝は兄を見付け、見物人の袂を潜つて、

『兄さん好い所へ来てくれたわ』と寄添つて事の顛末を語つた。雅子と綾枝とは、餘り好い日和なので、梅でも見て来いと叔母に勧められて電車へ乗ると、生憎にも小林軍曹等と乗り合せた。彼等は例の通りくだらぬ事を話し掛け、さうして何所まで行つても追跡する様に跟いて来る。幾分酒氣を帯びて居るので、何と云はれても逆はなかつたが、小氣味悪くなつたので電車を降りて了ふと、彼等も矢張降りて来る。そして人足の跡絶えたのを見済して、後から石を

投げた。それが運悪く雅子の足に當り、少し許りだが血が流れた。雅子も黙つて居られなくなつて詰問して居るところへ、巡查が遣つて来たので、遂に此の次第だとの事。

古暮は黙つて群衆を分けて仲へ入り、

『まア、一寸待つて下さい』と警官に向つて云つた。そして雅子の方を向いて、

『委細は妹から聞きました。貴女は嘸御立腹でもあらうが、是れは僕の中隊の下士です。そして僕が以前大層世話になつた方です。貴女に僕が切に願ふから、どうか僕に對して此の人を許してやつて下さい』



雅子はサツと面を染めた。我が將來を托さうとする古暮其の人の言葉は何て拒まう。

『はい。貴郎の仰せてすもの、何の様な事でも従ひます』

『宜しい、感謝します』

古暮は更に警官に向つて、

『被害者が此の通りです。して此の軍人は我が中隊の人ですから、是非赦してやつて下さい。僕は上官として責任を以て願ひます。又其の友人もです』

言々血と涙の籠つた句調で、頼む様に絶る様に云ふ。

警官も快諾して、

『宜しいです。折角の御希望ですから貴官にお任せします』と微笑した。

今迄此の始終を聞いて居た小林軍曹と平井とは、俄に古暮見習士官の手を握つて、

『我々は懺悔します。今迄悪意を以て貴下を苛めたことが度々ありました。然るに今其の怨を忘れて我々を救つて下さる。もう貴下は上官です。若し貴下が私であつたら何うでせう。私は愧ぢました』

『古暮豫備見習士官殿、更めて……』

ホロ／＼涙を落しながら、幾多の人の中で悔悟するのであつた。

(をはり)



小軍 歸 郷 の 後

水 暮

(一)

十一月も中旬で、或る日曜日の夜であつた。

僕は夕飯を済してから第三内務班の室へ行つた。室には電燈が點つて明るかつた。

兵士たちは思ひ／＼に芝居が何うとか、浪華節が何うとか、何所て何を見て来たとか、皆今日の楽しかつた事を語り合つては笑つて居る。一週一度の此の楽しさ加減は恐らく兵士諸君の獨占であらう。



其の楽しい團樂の一座を少し離れて、小森茂と云ふ上等兵が、今日届いたらしい手紙を眞面目くさつて讀んで居た。群馬縣碓氷郡の人で、品行方正學術優等、何時も隊中の模範に推されて、現に伍長勤務に服して居る。

『小森上等兵』

僕は斯う呼びかけながら室へ入つて行くと、兵士たちは云ひ合せた様に立つて敬禮する。

『何だか怪しうな手紙だな』と冗談らしく云ひかけると、

『何でもないんです』と笑顔で答へて、グル／＼無雜作に巻いて、封筒ともに衣囊へ突込んで了つた。

『さう匿さんでも良い。それとも見せられない様な事が書いてあるかね』と笑ふと、

『は。そんな事はありません』とニッコリ笑つて、餘り追窮してくれるなと云つた様な顔をして居る。

僕も餘計な事を聞いたところで仕方がないと思つて、急に話頭を轉じて、腰掛へ對つて坐した。

『今日は何の方面へ行つたね』

『△町方面です』

『又芝居かね』

『は』と云つたが、面白かつたと云ふ様に『ハ／＼／＼』と小森は



笑ひ出した。

「何をやつたね」と訊くと、

「盲兵士です。自分が軍人なだけに一層面白かつたのです」と今眼前に舞臺を控へて居る様に、勢込んで話し出した。そして目をパチパチさせて居る。

「實に彼の盲兵士には同情に堪へてすな。何です、許嫁になつて居た菊枝と云ふ女が、盲になつた垂井と云ふ兵士を捨てて、何所の馬の骨だか解らないハイカラ男と駈落するんです。月の冴えた晩、戀人と駈落して来て、或る川の橋の上で休みながら、此所まで來れば大丈夫です、貴郎は妾を春の國へ連れて行つて下さる恩人ですッ

て、男に縋り著く菊枝を見ては實に堪らんです。引捕へて打撲つてやりたいくらゐでしたよ」と力を入れて話す。

「ハ、ハ、ハ。それは面白かつたね」と僕も笑ふと、先生乗り氣になつて、作の梗概やら、舞臺面やら、それからそれへと語る。役者の月旦から見物人の動靜にまで及ぶ。中々振つたものだ。聞けば文藝には多少の趣味を有つて居ると云ふ。中學へ二年まで通つて、後は郷里で小學教員をして居たさうだ。

小森の話が意外に面白かつたので、僕は知らずくりに時を移して了つた。

點呼喇吠に驚いて室へ歸つた。



## (二)

其の後幾日か経つた。

我々一年志願兵等は、終末試験も済んでホツと一息した。もう満期になつて歸郷するのだと思ふと、やたら故郷の事が懐しく浮ぶ。

夕飯が済むと、同室の笠井は同郷の志願兵を尋ねると云つて出て行つた。後は僕一人て、歸郷の歓迎の有様、さては其の後の事など、種々思ひ浮べて微笑んで居ると、コツ／＼扉を叩くものがある。

『よし』と應へると、扉が開いて小森が入つて來た。

『や、今晚は淋しくツて困つてるところだ』と椅子を出してやる。

『は、さうですか』と小森はニコ／＼して腰をおろす。そして衣囊から煙草を出しかけて居る。

『時に除隊にはモウ幾日もないな』

『さうですね』

二人は顔を見合せて笑つた。

『除隊は誰も喜ぶだらう。美事現役を了へて歸るんだもの』

『さうですとも。然し二年や三年は夢ですね』と小森はさも嬉しうに笑ふ。

笑つた後は寂しい程静かだ。硝子の窓越には營庭が見えて、營舎の窓からは灯が霜夜に光つて居る。



小森は何だかモジクして居たが、急にあらたまつて、

「杉村志願兵殿」と呼んで、僕の顔を見て居る。

「何？」と僕は慌てて返辭した。

「貴下の鐵工場は………」と何か外に言ひたい様だが淀んで居る。

「あア鍛冶屋だからね」と冗談にして了ふ。けれども小森は頗る眞面目だ。

「如何てせう、私を何かに使つてくれられますまいか」と宣告でも待つ様な顔附。

是れて小森が僕に頼んで職を求めるとのことだけは解つた。彼の器用と如才ない所とは確かに役に立つだらうと思つた。然し彼が何う

して職を求めめるのか、それが聞きたかつた。

「何うして僕の所へなど來る氣になつたのか」

「何うしてと云ふ事もありませんが」と彼は煙草を吸ひ付けて置いて語り出した。

「一體私は二男で、然も嫂が喧しいものですから、故郷へ歸つても餘り永く居たくないんです。ですから東京へても行つて住はうかと思ひ附いたのです。それに……」

「それに戀人が居るか。ハ、ハ、ハ」と僕は思はず噴き出すと、小森は氣まり惡さうに面を染めて、

「はア、待つて居るんですが」と云ひながら、衣囊へ手を突込んで



手紙を出した。そして中身を抽いて僕の前へ出す。

『此の間の奴ぢやないか』と僕は手に取つて読んで見た。手紙はスラ／＼とした美しい女文字で、待ち焦れて居た二年の月日も夢の様に經つて春に會ふ様に楽しいと云ふ事から筆を起して、何時頃歸るとか、出迎に行きたいが人目を憚つて行かれないからとか、細々記してあつた。中には斯んな事もある。――

除隊後は成るべく早く目的を達する様なされたく、東京へ出て晴れて手を取ることを得る日を指折り數へて待ち居り候。爾なりし曉には、久しく胸に疊まれし塊も溶けて、なんばう嬉しかるべくと今より憧れ申し候。命に代へて妾が操を捧ぐることを得ば生涯の本望に

存じ候

斯んな文句の末に雪子と署名してある。

僕は讀み了つたとき、思はず『フ、』と噴き出して來るのを、やツと口の中で噛み殺した。

『お楽しみだね』と擲擲つてやると、小森は傍の方を向いて澄して居た。

(三)

間もなく除隊になつた。小森は下士適任證書と善行證書とを貰つてホク／＼して居た。



別れる時、一旦故郷へ歸つて直に上京すると云ふことで、將來の事を呉々も頼んで行つた。

僕も家へ歸ると、父は隠居したので、業務は總て僕が取扱ふことになつた。

十二月と來ては流石に寒い。任滿ちて歸つたのだと思ふと、氣が緩んで一層寒い。

月の中旬になつて、小森は大な旅行袍を抱へてやつて來た。一先づ僕の室へ入れて談話をして、夫々社員にも紹介してやつた。雪さんは何うしたと聞くと、

「まア當分は一人でなけりや食つて行けますまい」と笑つて居る。

「食つて行けるにしても、少しは貯蓄でもして準備してからの方が安全だね」

「是非其の積りです」と微笑んで居る。

小森には、宿直代りに當分社内に宿泊するが宜からうと話したら、大層喜んで居た。僕は近所の知人の家へ行く約束があるから、夜分又會はうと云ひ置いて出て行つた。

其の晩麥酒を抜いて馳走をした。小森は餘り飲まなかつたが、嬉しくツて酔つたのか、大分好い色になつた。

「歸郷の時何が一番面白かつたね」と僕は冗談半分に訊いて見た。「別に面白い事はなかつたです」



「雪さんは如何だつたね」と熊と眞面目になつて訊くと、  
「フ、フ、」と小森も遂に噴き出した。

「久し振りて嘸お楽しみだつたらう」と猛烈に追撃すると、

「はア」と高く笑つたぎり、そんな事は何うても良いぢやありませんか」と云つた様な顔をして居る。

「先生逆さに握られたと見えるな」と大笑をすると、

「そんな事があるもんですか。温和しい娘なんですもの」と眞顔になる。

「一體其の娘は何だね」

「小學教員をして居た者です」

「年紀は」

「二十歳になるんです」

「未だ若いんだね」と笑つてやる。

「自分でこんな事を云つちや可笑しいが、雪子は田舎には一寸珍しい美人です。だから同僚の中に大分逆上せてる奴があつたので、

今では學校を罷めて裁縫などして居ます」と益々眞面目になつた。

「君も艶福者だね。羨むべしだ」と笑つても、唯ニヤ／＼したばかりだ。

其の中に夕飯が出来たので、二人は對つて食べた。

女中が給仕に出ると、小森は莫迦に遠慮ばかりして居た。僕の家



女中は可成の美形だから、先生僕の妻だと思つたのかも知れない。夕食後は又一話。

軍隊の事、戦友の事、故郷の事、上京の事、将来の事、話は枝から葉と茂つて、寝たのは十二時近かつた。

(四)

小森は翌日から事務所へ出る。

其の中に新年になつた。例に依つて例の如く、新年宴會だとか何だとか喋いで居るうち、また半月消えて了つた。

隠居して居る母がやつて来て、お前が何時迄も獨身で居ては妹の片

附が遅れるからと云ふのを前提に、怒ろに結婚をすすめられた。候補者は既に略決つて居たので、話は存外に早く進み、三月に入ると直ぐ華燭の典を擧げた。僕も茲に至つて、唯乳の様な歡樂に酔つて了つた。

日はズン／＼經つ。何時しか花笑ひ鳥歌ふ四月になつた。

或る日小森は眞面目くさつて僕の所へ来て、

『社長さん』と呼ぶ。

『何?』とペンを持つた儘振返ると

『私も長らく寝起まで御厄介になつて居りましたが……』と云ひ悪さうに云ふ。



『何か、一家を構へるのか』  
『は』

『それはお楽しみだね』

多分彼の雪子を呼寄せたことと思つて皮肉ツた。

小森はケタ／＼笑つた。でも顔には満足の色が溢れて居た。

丁度花が散り始めた時分、地方の舊友が訪ねて來たので、其の歸國を送る爲め上野へ行つた。

流石は春に背かぬ花曇。彌生の生温い風が胸を吹いて、人の心も座ろ浮立つ日和である。

汽笛一聲友は北へ向ふ。僕はそれをプラットホームに見送つての歸途、不圖思出して小森の家を訪うてみやうと考へた。勿論重要な用事があるでもない。半ばは好奇心からである。

豫て聞いて居た下谷の御徒町。陰氣な家の建て列つた街を探して漸く尋ね當てた。小さな路次の奥だつた。入口は格子戸が嵌つて居る。何の氣なしに見上げると、小森茂と殿しい名刺が貼つてあつた。

(五)

潜り戸を開けるとチリンと鈴の音がした。すると十八九の美しい女が出て來て、



「何誰？」と怪訝な顔をする。

僕は是れが雪子だなと思ふと、思はず識らず頬に微笑が上つた。

「杉村です」

「アラ、左様で入らッしやいましたか。ホ、ホ、ホ」と振返つて奥の方を見て、

「貴郎、杉村さんが御見えになりました」と注進に及ぶ。

「なに、社長？」と小森の聲もする。

僕はズン／＼上つて行つた。雑誌を見て居たところと見えて、二三冊散らばつて居た。

「いやどうも不意打て………」と小森大にてれて居る。僕も餘り無

作法であつたと後悔したが、

「何も其んなに驚くことはあるまい」と笑ふと、

「え、別に驚くことはありません」と笑ふ。

其の中に女は茶を入れて出した。すると、小森は何か小聲で命令して居た。女は間もなく出て行つた。

僕は其の姿を見て氣の利いた女だと思つた。然し豫て薄々知らんわけでもなし、僕だけには前以て打明けて、正式に紹介しても宜さうなものだと少々不服だつた。

「君、彼れが雪さんかい」

僕は充分皮肉ツてやる積りで言つたのだが、言葉は案外優しかつた。



小森はスルリ頭を撫でて、

『申譯ありません。種々事情がありまして』といやに言譯する。

『實は日蔭住居の姿ですから、失禮ですがお話しも致しませんでした。其の中に何しますから何卒悪しからず』と要領を得ないことを云ふ。僕は可笑しなことだと思つたが、何とも云はずに居た。二人は沈黙して了つた。

其の中に女が歸つて來た。後から誰かが酒肴を持つて來た。

女の酌で飲む。二十歳だと聞いて居たが、二つぐらゐは若いと思つた。

『僕の妻も毎日遊んで居ますから、ちとお遊びに來て下さい』と話

を吹ツかけると、

『有難うございます』と、つつましやかに云つて『何卒お引立を願ひます』と首を下げる。

中々馴れたものだと思つた。

それから無駄話に花が咲いて賑かだつた。好い加減に酔つた頃、僕は辭して歸つた。

外へ出てから、彼の女は私かに故郷を出て、小森に約束の實行を強ひに來て居るのぢやあるまいかとも思つた。



一週間ばかり経つた。

小森は雪子を引連れて来て、いよいよ正式に結婚するから宜しく頼むと言つた。

僕もそれは芽出たいと祝して、相當の祝ひ物も贈つた。

事務員や職工の重なる者共も、何か祝つてやつたらしかつた。

結婚の晩には社の一室を貸して、質素な祝宴が催された。生憎僕は急用があつた爲め列席しなかつた。

其の後僕は多用勝て、二週間は關西地方の旅行に費して了つた。

歸つた頃は、富士一つ埋め残して青葉哉と歌はれさうな、青葉の世となつて居た。

社では皆能く働いて居た。相變らず冗談は盛んであつた。ふざけ者の石井は、頭の禿げたのも構はず、小森に毎日の様にからかつて居る。

「社長の新夫人、小森君の新夫人、ハ、ハ、ハ、實に堪らんね」などと平地に波瀾を起しかける。

「君も欲しからう」と小森が應戦する。

斯うした冗談が終始湧いて居る。時々僕も其の餘波を受けることがある。

「何時かね、僕が小森の家を訪ねた時さ、二人共莫迦にすまして居てね、ハ、ハ、ハ」と話の端緒を興へてやると、



「其の時ですか、新令夫人様がお手づからお銚子を取つてお進め申したのには」と例の石井が合槌を打つて皮肉な事を云ふ。

「ハ、ハ、ハ」と小森は唯笑ふのみ。

「小森君と來たら隅へは置けんからな」と石井。

「なせ」と小森はムキになる。

石井は澄したもので、

「是れて莫迦に女にもてるとは恐入つたね」と追撃すること愈急なり。

「莫迦を云へ。何方だか」と小森も高く笑つた。

僕は傍で唯笑つて聞いて居た。

「小森君は何です、開花亭で飲んでから米子と云ふ……」と石井が云ひも終らぬうち、小森は周章して遮つて、

「それは石井君の事です」と目を細くして僕に云ふ。

「さうかね」と僕はニヤ／＼して見せる。

「さうですとも。石井君と來たら全く烈しい。何子とか云ふ小森な女を捕へて、自然主義の鼓吹だなんて……」

石井は、急所の傷手に堪へかねた様に手を振つて、

「中止、取消し」と口早に止める。

其の様が如何にも可笑しかつたので、三人はドツと一緒に笑つた。

「ちや今度は小森君を追撃するぞ。宜いかね」



「僕には其んな奇談は一つもない」

「屹度ないかね」

「よし」

二人は笑ひながら争つて居る。

僕は唯笑つて見て居ると、小森は急に後の方を向いて、

「私は冗談どころぢやない、未だ仕事があるんだ」と石井を疎外にしてペンを執る。

(七)

其の後小森は時々缺勤する様になつた。何うしたのかと聞いて見る

と、頭痛がして堪らなかつたからとか何とか云つて居た。僕もさして氣にも止めずに居た。

或る朝だつた。僕が未だ寢床に居るうち、小森の妻君が是非會ひたいと云つて来て居るとして起された。僕は起きながら婢に聞いて見ると、泣いて居ると云ふ。何だか譯は解らぬが、大方喧嘩でもしたのだらうと思つた。

應接室へ行つて見ると、椅子にチャンと腰を掛けて居る。非常に衰れては居るが、著物や帯が好く似合つて、流石に美しく見えた。

「一體何うしたのだ」と椅子に凭りながら聞くと、

「はい」と丁寧に一つ頭を下げて、



「何でございます、此の頃夫が毎晩夜遊ばかりいたしまして、時によると泊つて来ることもございます。訊ねますと、友達の家へ泊つたなどと云つて居りますが何うも様子が可笑しいので……」と感極つてホロ／＼涙を落し、袂から桃色のハンカチーフを出してソツト險を拭く。

「それから何うしたね」

「それから今朝、妾一人て未だ寝つて居りますところへ女が参りましたんです。ですが夫が居ないものですから、直ぐ歸つて了ひました」と一寸云ひ淀んで、

「其の女が歸りがけに、あア詰まらない、小森さんは獨身だと云ふ

から頼みにして居たになんかと、ブツ／＼云ひながら歸つて了つたんです。妾は眞實に口惜しくツて……」と涙は青白い頬を流れるに任せて居る。

「それは不可な。そして何んな女だつた」と訊くと、

「藝妓の様なもあり、又料理店の女中の様な所もありました」と答へる。

僕は何時か一寸聞いた米子とか云ふ女だらうと心で決めた。

「よし。僕が一つ意見してやらう」

「はい、何卒お願い申します」とさも嬉しさうだ。

「然しお前も嫉妬は慎まんければならん。小森が歸つて來ても喧嘩



などしては不可よ」

「それは大丈夫でございます。夫は軍人ですから、何時までも莫迦な真似も致しますまい。聽て眼の覚める時であらうと今日まで黙つて居たくらゐてございます。ですが、今朝ばかりは堪らなくなりましてね貴郎……」

「さうだ、大丈夫だらう軍人の妻君だものね」と笑つてやつた。

雪子は尙呉々も頼んで辭し去つた。

其の日小森はトウ／＼出勤しなかつた。僕は態々小森の家を訪ふたが、未だ歸つて居なかつた。

翌日になつても翌々日になつても、小森は家へ歸らない。雪子は血

眼になつて心當りを搜したが、行衛は更に分らない。僕も相當の奔走をしてやつたが、何の功もなかつた。遂に雪子も断念めて、一先づ歸國して其の消息を待たうといふことになつた。

(八)

月日の經つのは早いものだ。夏になつたと思ふうち、もう秋風が吹く様になつた。

秋になつて、僕は召集せられて見習士官の勤務に服した。三月は夢の様は管内で暮した。歸るときには、豫備少尉に任せられて肩身が



廣かつた。

此の間、小森の消息は杳として知れなかつた。

もう今年も暮に近くなつた。突然小森から葉書が来た。文句は極めて簡単なもので、自転車で街頭を行く途中、馬車と衝突して重傷を負ひ、目下〇〇病院に入院中だとのことだけ書いてある。

僕は茫然として何とも云ひ得なかつた。

小森も實に呆れた男だ。何の顔あつてか僕にこんな手紙がよこせたものだと憤つてもみた。然し彼は重傷者である。其の罪を憎んで其の人にまで及ぼすは僕の本意でないから、翌日彼を病院に見舞つてやつた。

僕の姿を見た彼は、ホロ／＼涙を零して居た。白い病床に白い病衣を着て仰臥して居る様は、如何にも氣の毒だつた。頭から首の周圍まで繃帯してあるので、口もロクには利けなかつた。

看護婦が傍から話を引取つて、

「手紙も妾が代筆したくらゐで、あまり話をなさらん方が病人の爲めに宜うございます」と云つた。

僕は成程と思つて、看護婦から委細の病状を聞いた。看護婦は此の分て化膿さへせねば二三週間もかかれば全治すると云つた。

僕は小森と親しく語れぬのが聊か物足らなかつた。然しそれも致し方がない。



若干かの見舞金を與へて、間もなく辭し去つた。

(九)

一月ばかり経つと、小森は僕の家へやつて來た。額には少しの疵が  
残つて居た。

小森は僕の顔を見ると、病院で逢つたときの様に、物も云はずに涙  
を零して居る。

「何うしたね。其の後も訪ねやうと思ひながら、近頃莫迦に忙しか  
つたものだから……」と優しく云ふと、

「面目ありません」と男泣に唯泣くのである。

「私は懺悔します。過去の罪は何卒赦して下さいさう」と衷心から悔悟  
の状だ。

「君などは有爲の青年だ。幸ひに自愛し給へ」と慰めてやると、小  
森はハンカチーフで涙を拂つて、

「私は決して何も匿しません。あらひさらひお話いたします」と黙  
然となる。

「第一に恥を打開けねばなりません、私は既に妻ある身でありな  
がら、賤しい米子と云ふ女に迷つたのです。いや、當初は迷つたの  
てはありません、唯弄んで見たかつたのですが、段々女の美しさに  
酔うて來て、先方が非常に私を頼みとする様になつてからは、名譽



も恥も忘れて了つて、譯もなく深い懸の淵に沈んで行つたのです。ところが、米子が私の家を訪ふたことがあるさうです。其のとき妻が私に意見をしてくれと貴下に頼んださうです。」と語る。

「あア。其の時不幸にして君に會ふことが出来なかつたので、遂に今日に至つたのさ」と僕は簡単に云ふ。

「其の事は後で聞いたのです。私は米子と痴話喧嘩をして不愉快で堪らないところから、一週間ばかり方々を飲んで歩いて、家へ歸つて見ると妻は居ないんです。荷物はスツカリ片附けられて何もありません。私は妻が愛憎をつかして郷里へ歸つたのだと考へました。それで社へ出れば屹度貴下に意見を食ふ。もう焼蕪だ。恥も名譽も

要らないから、米子を連れて驅落でもしやうと思つて、例の開花亭へ行つたのです。ところが米子は私の傍へ寄り付きもしません。益益自棄になつて、押し掛けて行つて引捕へると、女ながらも天晴な者です。貴下は軍人だと云つたぢやありませんか、軍人なら軍人らしい態度をお取りなさい、現役でも豫備でも同じ事です、立派な妻君がありながら、よくも他人を玩弄にしましたね、もう其んな人は話をするさへ汚はしいから側へ寄つて下さるな、と美事に肱鐵砲を食はされたのです。私は豁然として夢が覺めました。嗚呼此んな賤い女にさへ此の意氣があるんです。身軍籍に在る私が、畏れ多くも陛下が股肱と頼ませられると知りながら、此んな汚はしい事を



したのです。もう斯うなると居ても立つても居られません。私は此の晩非常の決心をしたのです」と力を入れる。

僕は小森を頼母しい男だと思つた。

「敬服。君が反省を衷心から賀するよ」

(一〇)

「そこで私は、全く心を入替へて社會に立たうと考へました」と心から語るのである。

「僕も君の心機一轉は何より嬉しいよ。君と僕とは單に社長對社員的關係ばかりぢやない。隊に在つては战友として、互に骨を拾はふ

と約した仲ぢやないか。今日迄の君の動靜には聊か僕も怒つたよ。

然し君との關係を考へ、又今君の話を聞いては、實に同情に堪へん

よ。君が今後全く心を改めて社會に立つのなら、僕は應分の助力を惜

まんよ」と且勵し且慰めてやる。

「有難う」と小森は云つたが、長い睫毛には涙の珠を宿して居る。

「私は改心の第一著手として、妻を呼び返し、社長たる貴下にも謝

罪して、再び以前の狀態に戻らうと考へて、先づ郷里にある妻に其

の趣を云つてやつたのです。ところが妻の返事が頗る振つたもので

ありました。妻は軍人の妻です、軍人の妻は普通の人の妻よりは別

の覺悟が必要で、貴郎も軍人である以上は軍人らしい仕事をなさ



い、そして今日までの恥を雪ぐことが出来たなら、妾は以前に倍する誠實を以て仕へます、それまで妾は身を慎んで何年でも待つて居ます、何卒天晴の名を擧げて、一日も早く妾を呼び返して下さり、との意味なんです。僕は益々窮地に陥つて了つたのです」とハンカチーフで額の汗を拭ふ。

「そこで私は考へました。今や各國共盛んに空中飛行機の研究中であつますが、未だ完全無缺のものが發明されたことを聞かないんです。ですから之を發明したら、嘗に私の名譽ばかりぢやない、國家の爲め、又陸軍の爲めにもなるだらうから、百難を排して是れを行つて見やうと決心しました。それから私は或る飛行機の製造工場へ

職工に化けて住み込んで居たのです。ところが幸ひに研究が届いて私は一種最新式の奴を案出したのです」と何物かの光が眉間に溢れて居る。

「それは事實かね」と思はず僕は叫んだ。

「私は資本がないから、それを組立てる迄には行きませんが、考案だけは此の通りです」と懐から圖案を出す。

僕は一見して驚いた。小森が何うして斯う云ふ發明をしたか。案は確かに今日までの飛行機の何物をも凌いだ逸品である。

「よし。小森君、全力を擧げて發明に従事し給へ。材料も費用も全部僕が供給しやう。妻君も電報を以て呼び寄せることにしやう」と



小森の手を握つた。  
「社長さん、私は杉村社長の厚意を感謝します。私は更めて此の飛行機の完成を誓ひます」と小森は更に僕の手を堅く握り返した。  
(をばり)

明治四十四年六月七日印刷  
明治四十四年六月十日發行

正價金拾錢

著作者 水 暮 生

發行者及印刷所 相 澤 富 藏

發行所 厚 生 堂 印刷部

東京市京橋區南傳馬町登丁目壹番地  
電話番號京橋八參八番  
振替口座東京參貳八參





# 厚生堂刊行史傳小説目錄

塚原澁柿君著○結城素明君畫

日本  
戦史

桶 狭 間 役

菊版洋布製色箔入美本  
正價金八拾錢送料八錢

澁柿園先生の歴史小説は實に天下の逸品たり今や先生弊堂の請を容れ日本戦史の起稿に著手せらるる本書は即ち其第一巻にして如炬の史眼と椽大の麗筆とを以て今川織田兩氏興廢の事蹟を詳叙し正確なる事實の中に小説的趣味を含有せしめ讀者をして手巻を措くこと能はざらしむるもの蓋し先生獨擅の妙技なり

塚原澁柿君著○結城素明君畫

日本  
戦史

姊 川 役

菊版洋布製色箔入美本  
近刊(六月下旬發行)

平易の文よく古英雄の面目を活描し靈妙の筆座邊に風雲を捲き起し來る一讀史實の奇に駭き再讀兵機の微に驚き三讀儒夫をして奮然躍起せしむるに至るもの是れ澁柿先生の名著日本戦史なり爰に第一巻桶狭間



二  
役を發賣するや好評噴々として江湖に喧傳し洛陽の紙價爲に高からんとす今や第二卷姉川役の稿漸く成り濃艶華麗前卷に優るの新粧を凝して諸君の前に提供せられんとす請ふ刮目して見よ

伊藤銀月君著○結城素明君畫

青年の秀吉

木版口繪入三六版美本  
正價金參拾錢送料四錢

著者は日本に於ける無二の秀吉研究者にして秀吉に關する古今の史籍は之を見盡し以て一家の創見を開けり本書世に流布せる小説的俗傳を排し正確なる青年の秀吉を傳ふ文章は天下一品にして趣味は小説に優り然かも書中の秀吉は之を切れば赤き血の出づる生ける人間なり以て青年の活教育となすに足る

伊藤銀月君著○結城素明君畫

中年の秀吉

木版口繪入三六版美本  
正價金參拾錢送料四錢

『青年の秀吉』を繙いて著者が秀吉に就いての研究の十二分に至れると其描寫の精透、其議論の卓拔、其文章の巧妙とに驚きし讀者は必ず進

んで本篇を讀まざるを得ざるなり中國を攻め明智を討ち柴田を滅ぼし終に家康との對局に至る波瀾層々應接に暇あらずして然かも英雄の眞相遺憾なく此間に發揮せらるる正に秀吉の最も光耀せる時期なり著者の眼光英雄の骨髓に徹して文章亦雄烈を極め颯々として紙上に聲あらんとす一たび巻を披かば則ち手の舞ひ足の蹈む所を知らざらん

伊藤銀月君著○結城素明君畫

晩年の秀吉

木版口繪入三六版美本  
正價金參拾錢送料四錢

是れ華麗を極め莊重を極め遂に淒涼を極むるに至りし豊公の晩年を描きたるものにして文亦圓熟を極め恰も天衣の縫なきが如し島津を征し北條を亡し東北を定め關東を平げたる稀世の雄畧と朝鮮入道を蹂躪し大明四百餘州を席卷せんとせし曠代の壯圖とは盡く收めて本篇に在り英雄中の英雄が眞相を知らんと欲する士は須く秀吉傳の最終卷たる本篇を繙くべし

伊藤痴遊君著○結城素明君畫

鐘崎三郎

三色版繪入三六版美本  
正價金四拾錢送料四錢



鳴呼鐘崎三郎の名は如何に日本男兒の血を沸かすに價せるものぞ廣島大本營にては無位無官にして天顔に咫尺するの榮を擔ひ遂に金州城に於て敵人の慘刑を受け従容として猛火の中に立ち骨肉盡く灰となるに至るまで國家の爲に盡すことを止めざりし日清戰役當時の軍事探偵其壯烈鬼神を泣かしむる傳記は本書の外に求むること能はざるなり

關根水暮君著○結城素明君畫

軍事小説 つ る ぎ

菊 半 裁 版 美 本  
正價金拾錢送料金貳錢

關根水暮君著○結城素明君畫

軍事小説 奮 闘 記

菊 半 裁 版 美 本  
正價金拾錢送料金貳錢

値段が安いからとて決して莫迦にしたまふな此二書は田園詩人關根水暮先生が最近の傑作にして筆に靈あり文に神あり卷中の人物各々其性格を十二分に發揮して活躍飛動せざるはなし嘘と思召すなら請ふ速に讀んでみたまへと云爾

京都帝國大學講師池邊義象君著

軍事小説 御 旗 の 光

菊 版 繪 入 美 本  
正價金廿五錢送料四錢

此書は池邊藤園先生の麗筆に成り旅順攻圍軍に加はりて一は譽を負ひて死し一は傷き歸りて更に大事業を計畫したる二兵士の慷慨談、情あり誠あり文優に事盡き眞に稀世の好小説たり

軍事小説 破 彈 片

菊 半 裁 版 美 本  
正價金拾錢送料金貳錢

一 劍 士 君 著

軍事小説 新 兵 一 期 間

菊 半 裁 版 美 本  
正價金拾錢送料金貳錢

橋 亭 主 人 君 著

軍事小説 兵 營 夢 物 語

菊 半 裁 版 美 本  
正價金拾錢送料金四錢



軍事小説 兵營露團團

菊半裁版美本  
正價金拾錢送料金四錢

軍事小説 三年の夢

菊半裁版美本  
正價金拾錢送料金貳錢

大畑裕君著

軍事小説 陣中の夢

菊半裁版美本  
正價金拾錢送料金貳錢

軍事小説 續陣中の夢

菊半裁版美本  
正價金拾錢送料金貳錢

柳亭主人君著

軍事小説 兵卒會議

菊半裁版美本  
正價金拾錢送料金貳錢

無名氏著

喜劇脚本 日露軍記旅順の浦風

菊半裁版美本  
正價金拾錢送料金貳錢

以上九書は江湖に流傳すること既に年あり其いかに面白さかは復た茲に贅するを要せず未讀の諸君は速に一讀したまふべし

錦城齋典山君講演○今村次郎君速記

堀部安兵衛

三六版繪入美本  
正價金拾錢送料金四錢

松林伯知君講演○石原明倫君速記

西郷隆盛

三六版繪入美本  
正價金拾錢送料金四錢

一龍齋貞山君講演○今村次郎君速記

荒木又右衛門

三六版繪入美本  
正價金拾錢送料金四錢



266

235

一龍齋貞山君講演○今村次郎君速記

楠 正 成

三六版繪入美本  
正價金拾錢送料金四錢

近時講談の出版せらるるもの頗る多きも多くは鄙猥に涉り無稽に流れ  
軍人諸君が消閑編讀に適するもの少し弊堂之を慨し大に武士道的に流  
講談を蒐集し逐次刊行して以て娛樂の間に軍人精神を鼓吹せんと欲す  
其内容の如何に壯快多趣なるかは請ふ之を演者の名聲と書冊の題號と  
に徴せられよ

大阪時事新報記者山田北洲君編

老 雄 懷 舊 談

四六版老雄肖像入美本  
正價金參拾錢送料四錢

此書は井上馨侯、東久世通禧伯、土方久元伯、曾我祐準子、三浦梧樓  
子、谷干城子、柴山矢八男、茨木惟昭男、三好成行男、木梨精一郎男、波  
多野毅男、沖原光孚男、大鳥圭介男、北畠治房男、木梨精一郎男、佐  
良原繁男、西各懷舊談を蒐録したるもの北清事件より近頃は日露海戦に至るま  
賀の亂、西南の亂、朝鮮事件、其當時を追想詳説せられたる者なれば談  
て各其局に當りたるは固より多言を待たざる所なるべし  
論風生趣味津津々たるは固より多言を待たざる所なるべし

論風生趣味津津々たるは固より多言を待たざる所なるべし



